

〔特集〕

「循環型地場産業」研究への道のり

——「働・学・研」協同の半生を振り返る——

熊 坂 敏 彦

専修大学（非常勤講師）

要 旨

約40年間、金融業界で働きながら「地場産業」の調査研究を行ってきた。笠間焼産地の調査に始まり、益子焼産地、結城紬産地、日立ひたちなか産地、清酒製造業産地など、研究対象を拡げてきた。そして、「地場産業」の「産地革新」の研究の中で、「地場産業」は「持続可能な循環型社会」や「脱成長・定常型経済」の創生に貢献するという仮説を立てた。新時代の地域創生を促進する地域産業を「循環型地場産業」と名付け、その理論化と実証研究をライフワークに定めた。このような「地場産業」研究の道のりを振り返ると、原点としての大学時代の経験や恩師との出会い、就職後の「長銀調査部」での経験、名古屋勤務で得られた出会いと研究材料、産業学会や金融学会における様々な先生方との出会いとご指導など、ループ状に様々な出会いと発展の経緯が浮かび上がる。今後も出会いやネットワークを大切にして、「働・学・研」協同の研究生活を送りたい。

キーワード：「働・学・研」協同 地場産業 循環型地場産業 笠間焼産地 長銀調査部

My way of studying cyclic local industry:

Looking back on my life of learning and studying while working

Toshihiko KUMASAKA

Part-time lecturer
Senshu University

1 はじめに

私は、約40年間のサラリーマン生活を終えた68歳の「年金生活者」である。現在は、専修大学で非常勤講師として週1コマの講義を受け持っている。また、昭和女子大学の現代ビジネス研究所の研究員として、年に一本の論文を書くことを目標に、ささやかな「働・学・研」協同の生活を送っている。

1975年に大学を卒業すると同時に銀行に就職し、28年間勤務した。その銀行が破綻した後は、64歳まで転々としたサラリーマン人生を送った。他方、学生時代から「大学人研究者」に強い憧れを持っていた。紆余曲折の人生を歩む中で、初心を忘れることなく、「社会人研究者」の道を歩んできた。

2005年に、産業学会で十名直喜先生と出会って「働・学・研」協同の道を知り、以後、長年にわたり、ご指導をいただいていた。2013年に、日立ひたちなか地域の共同調査を行い、単著執筆・博士号取得に向けたご助言やご指導等もいただいていた。しかし、私の「学・研」生活は、遅々としており、未だに「夢追い人」のままである。したがって、十名先生の退職記念論集に載せていただく資格要件に悖るが、今回、自分自身の振り返りとこれからの人生の道標とすべく、筆を執らせていただく次第である。十名先生に執筆の機会を与えていただいたことに感謝申し上げたい。

以下、「社会人研究者」として、ライフワークである「地場産業」研究に取り組んできた経緯を振り返り、その間の様々な先生方との出会いによる研究活動の展開、「働・学・研」協同への取り組み、「地場産業」研究の発展形（ゴール）としての「循環型地場産業論」研究等について叙述したい。

2 「地場産業」研究の「原点」

2.1 「工業経済研究会」と中小企業実態調査

「地場産業」研究の「原点」は、学生時代にある。

1971年に東北大学経済学部に入学する。4年間、経済学部の「工業経済研究会」(通称「工研」)という中小企業研究のサークルに所属した。「工研」は、1年生から4年生まで、経済・経営・会計等多様なゼミナールの学生が集う「スーパージェミナール」で、歴史も深く、先輩諸氏も多い。ゲーム理論の一人者である鈴木光男先生や長銀最後の頭取を務めた鈴木恒男氏等も在籍されていた。当時の指導教員は、統計学の米沢治文先生と工業経済学・アメリカ産業論の金田重喜先生だった。

「工研」の伝統的で特徴的な活動は、山形県から中小企業実態調査を受託していることだった。毎年夏休みに山形県の産地に出向き、事前に郵送したアンケートに基づき経営者にヒヤリング調査を行った。この実態調査では、農機具、木工家具、鋳物、メリヤスの4産業を調査し、報告書作成を分担した。卒業時に、4年間の調査を総括してゼミナール協議会の論集「萩論叢」に「山形県中小零細企業（製造業）の概況—その地場産業的特色を中心として—」と題した論文も書いた。これが自分にとって「卒論」のようなものであった。

2.2 ゼミナール活動・集中講義

学部のゼミナールは、国際経済論の村岡俊三先生の門を叩き、マルクスの経済学体系の「後半プラン」(国家・外国貿易・世界市場)の完成を企図された村岡先生のもとで、グローバルな視点から「多国籍企業」(資本輸出)や「南北問題」について学んだ。資本論研究の田中菊

次先生や帝国主義論研究の原田三郎先生などの講義や著作を通じて、経済学の体系性・理論に関心を深めたのもこのころであった。

また、集中講義で経済地理学を受講し、当時流通経済大学（のちに東北大学理学部）におられた板倉勝高先生と出会い、「地場産業」という概念を知った。これが「地場産業」研究のもうひとつの「原点」となった。

こうして、大学時代はゼミナール活動やインターゼミナールなどへの参加、さらに夏休みの山形県中小企業の実態調査や宮城県石巻市北部・北上地区漁村の出稼ぎ実態調査への参加等を通じて、「フィールドワーク」に関心を深め、自分なりに「理論」と「実証分析」との融合に腐心したことを思い出す。大学院進学も考えたが、父が大学4年の秋に急逝したこともあって諦め、日本長期信用銀行（現新生銀行、以下「長銀」と略す）への就職を決めた。

3 憧れの「長銀調査部」で学ぶ

3.1 長銀への就職と憧れの「長銀調査部」

1975年4月、日本経済の「高度成長期」が終わり、第1次オイルショックやニクソンショックという大変動期を経て「安定成長期」に入っところ、長銀に就職した。第一志望は、調査部であった。

当時、銀行の調査部は、病気の人とか病み上がりの人が行くところという俗説があった。しかし、その頃の「長銀調査部」は、学生から見ても輝いていた。大学の図書館で見た長銀の「調査月報」の内容が、質量ともにレベルが高く、光っていた。それに当時の調査部長、竹内宏氏は「柔構造の日本経済」「路地裏の経済学」をはじめわかりやすいが鋭い論説を出し続けていた。

入行後4年間、仙台支店で東北6県の大企業の「分工場」や地場の中小企業向けの融資を担当した。5年目の夏に憧れの「調査部」行きの辞令をもらった時には、大いに喜んだ。支店長に「君は営業向きかと思っていたが、調査部を希望していたというので驚いた」と言われた。

3.2 「長銀調査部」で学んだこと

調査部では、水を得た魚のごとくとは言えないまでも、寝食を忘れて大いに「働・学・研」が一体となった生活を送った。今思えば幸せな時期であった。

石油・エネルギー担当として、国際石油情勢（OPEC・産油国動向、原油価格動向）、オイルメジャーズ動向、わが国の石油精製業界動向、北米の長期的エネルギー動向と対極東供給余力、韓国・台湾・香港のエネルギー事情と海外炭需要、石油代替エネルギー開発動向（石炭、LNG、再生可能エネルギー）等、業務として与えられたテーマに貪欲に取り組んだ。

「長銀調査部」では通常1年で1本のレポートを書き、「調査月報」として印刷物にしていた。徹夜で書き上げた原稿に、マンツーマンの指導者が跡形もないぐらい真っ赤に筆を入れて突っ返された。さらに、次長や室長からのコメントも加わる。大学で「卒論」を書かなかった自分にはハードに鍛えられた時期であった。この時の経験は、後にシンクタンクや大学の論文作成指導などで大いに役に立っている。

当時の長銀は、長期金融専門銀行として国の産業政策形成に係わりを持ち、基幹産業の業界調査を通じて取引先企業の経営戦略策定に貢献していた。私も、通産省の石油審議会向けに銀行が準備する石油業界再編成に関する調査レポートなどを作成した。石油審議会が行った「欧米石油産業調査団」の随行員として欧米のメ

ジャーズなどのヒヤリング調査に出向いたこともあった。また、石油会社や石油連盟の方々、日本エネルギー経済研究所、中東経済研究所、電力中央研究所のエネルギーエコノミストの諸氏から学ぶことも多かった。

3.3 地域産業調査への接近：ローカル・エネルギー・システム調査

長銀調査部では、エネルギー調査担当であり、「地域産業」や「地場産業」調査とは縁が薄かった。

ところが、ある日、上司から突然、「欧米ローカル・エネルギー・システム調査団」に参加して、海外の地域エネルギー事情、再生可能エネルギー開発利用状況の調査をしてくるように命じられた。東京大学工学部の平田賢教授を団長に、エンジニアリング振興協会加盟企業の技術者の諸氏とアメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ドイツ、ハンガリー等を、2週間にわたる視察調査を行った。ソーラーエネルギー、風力エネルギー、地熱エネルギー、バイオマスエネルギー、廃棄物エネルギー等の現場やモデル事業を見て回った。この調査で初めて自分が希望していた調査テーマと仕事で与えられたテーマが合致した。

「循環型社会」、「地域分散型システム」、「再生可能エネルギー」、「省エネルギー」、「コージェネレーション」、「ソフトエネルギーパス」（エイモリー・ロビンズ）等、当時としては極めて先進的なテーマや概念と向き合うことができた。

「調査月報」の処女作、「わが国石油精製業の変貌と今後の対応」（1980）は難産であったが、第2作「ローカル・エネルギー・システム開発の現状と課題」（1981）は、集中力を発揮して1か月で書き上げた。その中で、なぜか山形の「地場産業」についても触れている。山形には、

多様な「地場産業」が集積しており、地域内で相互に関連し、地域エネルギーの創生にも関係していること等を指摘していた。「地場産業」研究への隠された思いを感じさせる下りである。

4 銀行員としての「働・学・研」協同時代

4.1 調査を離れて営業担当に

調査部を4年で「卒業」し、1984年から2年間、エネルギー調査の実践的活用ということで、伊藤忠商事のエネルギープラント営業部に体験出向することになった。エジプトやイラク等、中東諸国のエネルギープロジェクトとプロジェクトファイナンス業務に携わった。

その後は、もっぱら国内の融資業務を担当し、大企業向けの提案型営業や手数料ビジネスの推進、「空中店舗」での中小企業の新規開拓業務等に従事し、「調査・研究」生活からは遠ざかった。

4.2 名古屋支店勤務の辞令

そうした中で、1991年から3年間、名古屋支店の営業部へ転勤となった。トヨタ自動車と同グループ企業を始めとした名古屋のものづくり企業を担当することになった。これが契機となって、自分の「働・学・研」協同の生活に再度火が付いた。

4.3 名古屋支店における「地場産業」との出会い

名古屋での3年間は、後々自分の「働・学・研」協同の生活の基礎となるような実りある体験を数多くさせていただいた。それらを列挙すると、以下のとおりである。

(1) トヨタグループ（本体、直系企業10数社、下請け中小企業）との取引を通じて、工場

見学を100カ所以上行い、ものづくりの現場の力、トヨタグループの技術力と生産システムの素晴らしさを実感することができた。

(2) 自動車関連企業との新規取引開拓の一環として、長銀総研、名古屋大学、愛知県の自動車産業担当とタイアップして取引先社長向けに「自動車部品セミナー」を企画した。

(3) 中部経済連合会の定例会議に出席し、当時、愛知教育大学におられた宮川泰夫先生と親しくさせていただいた。宮川先生は経済地理学が専門で、板倉勝高先生との関係が深く、日本各地の伝統的地場産業産地研究も数多くなされていた。

(4) 中部地区大企業経営企画担当者のインフォーマルなネットワークである「中部戦略研究会」のメンバーに入れていただき、月に一回テーマを決めた勉強会と飲み会、年に1回の旅行に参加し、深く中部地域の産業について学ぶことができた。

(5) 休日の趣味として陶磁器産地（窯元）巡り、ぐい呑み収集を始めた。瀬戸、赤津、多治見、常滑、伊賀、四日市、信楽等、名古屋から日帰りができる陶磁器産地を休日に巡り歩き、「やきもの」の魅力に取りつかれた。同時に、「地場産業」としての「陶磁器産業」にも関心を持つに至った。

4.4 名古屋での3年間

長銀は、バブル時代に膨らんだ不稼働資産や系列ノンバンクの不良債権処理に係わる「母体行責任」を背負い、1998年10月に破綻した。今思えば、私が名古屋支店に勤務したこの時期は、長銀の最後の「良き時代」であり、私のサラリーマン生活の中で最も「輝いていた時期」であったかもしれない。

5 様々な出会いと「地場産業」研究の展開

5.1 笠間焼産地研究事始め

名古屋から東京に戻って、銀行の中でやきものに興味を持つ仲間たちと「長陶会」という作陶クラブを立ち上げた。そして、名古屋時代に親しくさせていただいた瀬戸の陶芸家・加藤春鼎先生とご長男の加藤孝先生が主宰されていた中野富士見町の陶芸教室に月に数回、夜にお邪魔して土との格闘を始めた。

その中の一人、同期の親友・渡部佳文（源土）君が陶芸にはまり、銀行を早期退職して茨城県笠間市にある茨城県立窯業指導所に入所、その後陶芸家として独立した。不器用な自分には、轆轤で土を引き上げて形よく成型するようなセンスがなく、陶芸家になることは諦めた。そのかわり、新しい「趣味」として名古屋時代から関心を持った「地場産業」としての「陶磁器産地」の「調査」をすることにした。

こうして、私の「笠間通い」が始まった。会社勤めをしながらの趣味としての調査研究ゆえ、土日の調査活動に限定された。笠間でも多くの方々との出会いがあった。山口伸樹市長をはじめ笠間市役所の方々、笠間の個性的な陶芸作家の方々、陶磁器協同組合、窯業指導所、陶芸美術館等、笠間の多くの関係者から沢山のことを学ぶことができた。

5.2 産業学会での出会い

長銀を退職して第2のサラリーマン人生を始めたころに、長銀調査部の同僚であった専修大学経済学部の中田隆之教授から産業学会と日本金融学会への入会を勧められ、2002年4月に入会した。その後、この2つの学会における諸先生方との出会いが自分の研究人生を大きく変えることになった。

笠間焼産地の自主研究を「論文化」しているところに、長銀調査部時代に電力中央研究所の研究者として交流があった武蔵大学の廿日出芳郎先生と再会した。そして、武蔵大学の「紀要」に「笠間焼産地」を事例とした「地場産業による地域・コミュニティ再生の可能性」という小論を書かせていただくことになった。私にとって、笠間焼調査・地場産業研究を公表することになる第一歩であった。

産業学会入会時にお世話になった日本大学の古賀義弘先生（のちに嘉悦大学学長）からは、この論文作成過程で格別なご指導をいただいた。まるで卒論指導のように、作成途上の原稿を郵便でやり取りさせていただき、添削していただいた。さらに、出来上がった論文を産業学会で報告するよう助言をいただき、学会報告もデビューすることになった。

2005年6月に法政大学で行われた産業学会ではその後長年お世話になることになる多くの先生方との出会いがあった。名古屋学院大学の十名直喜先生、専修大学の大西勝明先生、中央大学の山崎朗先生などである。

十名先生は、私の拙い報告に対して的確な質問と温かい助言をしてくださった。そして、後日、ご自身が調査された瀬戸焼産地の調査報告書などをお送りくださった。専修大学の大西先生は、専修大学の二部の非常勤講師として講義をする機会を与えてくださった。その講義は、以後11年間続くことになる。

5.3 金融学会での出会い

金融学会では、私のふるさと・福島にある福島学院大学学長の下平尾勲先生（福島大学名誉教授）と出会い、懇親会で親しく「地場産業」の話をさせていただいた。下平尾先生は金融理論の大御所であったが、「地場産業論」でも多

くの研究成果を上梓され、学生時代からお名前を存じ上げていた。特に、有田焼産地の調査研究で有名だが、笠間焼や益子焼も調査しておられ、調査資料等をお送りくださった。そして、折に触れてお便りを下さり、「今日の研究者の最大の欠陥は現場の生々しい調査をしないことです。『現場に神宿る』です。日々の努力は必ず実を結びます。」などと激励してくださった。

東北大学でお世話になった2人の恩師からも、私の遅い「学・研」生活に対して激励をいただいた。村岡先生からは、現状分析の際の論理性、早く単著に仕上げること等、金田先生からは研究のステップと論文作成の方法、東北大学の後任の川端望先生が主宰される「現代産業研究会」の紹介等、沢山のご助言をいただいた。古賀先生、下平尾先生、村岡先生、金田先生は、既に鬼籍に入られた。残念ながら、まだ諸先生方の期待、学恩にお応えすることができていない。

5.4 専修大学非常勤講師としての「学・研」

専修大学二部(神田キャンパス)の講義では、「地域産業」をテーマに、毎週土曜日に15コマを講義した。二部の受講生には、社会人も多く含まれており、熱心な学生が多かった。その中には後に国会議員や市議会議長に選ばれた人たちもいた。

働きながら毎週90分の講義を組み立てていくことは労苦が多かったが、他方、楽しいことでもあった。「教えることは2度学ぶことである」というが、講義は自分自身の勉強であり、受講生から刺激とパワーを大いにもらうことができた。

その後、2016年から、田中隆之先生のご紹介で、専修大学経済学部(生田キャンパス)で、「産業構造論」年間30コマの講義を担当するこ

とになり、大教室で200～300人相手の講義をさせていただく機会に恵まれた。次世代を担う若者に、自分の孫子に対して思いを伝えるように、90分間、熱く語ることができることは至上の喜びであり、何物にも代えがたいものである。

6 第2のサラリーマン人生における「地場産業」研究

6.1 筑波銀行・筑波総研での5年間

第2のサラリーマン人生で、生命保険会社と小さな証券会社の役員・企業経営を経験したのち、ご縁があって、茨城県の地方銀行である関東つくば銀行（現筑波銀行）に就職した。地域産業調査、シンクタンクの立ち上げ等の要員として5年間、お世話になる。ここで、ライフワークにしたいと思っていた「地場産業」や「地域産業」の調査を仕事にできるという幸運に恵まれた。

茨城県内を中心に、車を駆りながら自分の足で取材に明け暮れた。企業のヒヤリング調査には取引担当の支店長が同行することが多かったので、取材もスムーズにでき、多くの情報を得ることができた。

5年間に、「調査月報」のレポートを8本、やや長めのレポートは「調査情報」という冊子に25本、自分自身が決めたテーマで、自由に書かせていただいた。「地場産業」については、笠間焼、益子焼、結城紬、稲田石・真壁石、日立ひたちなかのものづくり産地、清酒製造業等、「地域産業」については、茨城県の農業、商業、観光業など、テーマ別には、東日本大震災の影響と復興後の地域社会経済のあり方、まちづくり、地域ブランド、筑波のハイテクベンチャー、女性活躍推進、シニアの活躍、地域通貨・地域

ポイント制度等について調査レポートを書き、取引先向けに講演等を行った。

シンクタンクの立ち上げに関しては、長銀調査部時代の経験と人脈を頼りにしながらお手伝いを行った。日本政策投資銀行系の日本経済研究所、旧長銀系の価値総研、筑波大学、茨城県の関係者等のご協力を得て、優秀なスタッフも採用・育成でき、独自のスタイルを有する地銀系シンクタンク「筑波総研」が創設できた。そして、「筑波経済月報」創刊号（2013年8月）には、十名先生に「ひたち・つくばモデルと名古屋圏モデル—21世紀型産業・地域モデルの創造に向けて—」と題する特別寄稿を賜った。

「調査情報」は、ネットで公開しているが、筑波総研で最後に書いた「女性活躍」に関するレポートがBSフジ「プライムニュース」のディレクターの目に留まり、2時間生放送にコメンテーターとして出演させていただいた。これが、「卒業記念」となった。

6.2 昭和女子大学現代ビジネス研究所という「働・学・研」協同の組織

昭和女子大学には、現理事長・総長の坂東真理子氏の発案による、現代ビジネス研究所というユニークな研究機関がある。この研究所は、企業や官庁などで実務を経験した社会人が、大学教員や学生と共同で、研究・教育・ビジネスなどを行う産学官連携プラットフォームで、正に「働・学・研」協同の研究所である。年に何回か、サロン、セミナー等があり、研究員同士の交流、大学の先生方との交流、学生を交えた研究や研究報告会等が開かれる。現在約50名の研究員が登録している。

長銀の大先輩で同大学の元理事長を務められた平尾光司先生からご紹介いただき2015年から研究員になった。

私は、最初2年間、平尾ゼミナールで日本酒をテーマにしたサブゼミナール活動をしている5名の学生と日本酒地場産業の共同調査を行った。夏休みには、茨城県、栃木県、秋田県、新潟県に出向き、酒蔵を見学、蔵主へのヒヤリング調査を行った。それを、学生各自は卒論としてまとめ、私自身は「紀要」に「研究ノート」としてまとめた。

次の2年間は、単独調査で、「地場産業」をテーマに、従来の「地場産業」の「産地革新（イノベーション）」のDNAが、「持続可能な循環型社会」の形成や「脱成長・定常型経済」の創生に貢献するという仮説を設定し、「循環型地場産業」という概念を作り上げ、その事例研究に着手した。このテーマは、十名先生のご著書やご助言に負うところが大きい。

今後、地域産業政策論の中に「循環型地場産業」を位置づけながら、理論化と事例研究を積み重ねていきたいと考えている。

7 おわりに

以上みてきたように、私の「地場産業」研究は、「日暮れて道遠し」の感もする。しかし、「人生100年時代」と言われる現在、今までに多く

の諸先生方からいただいたご指導を無にすることなく、この先も初心を忘れずに「学・研」生活を続けていきたいと思っている。

最後に、恩師・十名直喜先生に改めて感謝し、今後とも健康に留意されて学究生活を継続され、私たち後進のご指導も継続していただくことをお願いして、筆をおきたい。

(2019年7月 満68歳の誕生日に)

主要著作

- 「地場産業による地域・コミュニティ再生の可能性—茨城県笠間焼産地を事例として—」(2005)『武蔵大学論集』第53巻第2号
- 「地場産業産地の競争力とイノベーション—笠間焼産地の事例を中心に—」(2006)『産業学会研究年報』第21号
- 「循環型地場産業の創造—脱成長時代の地域創生への視座」(2016)『経済科学通信』141号
- 「『循環型地場産業』の創造—新時代創生・地域創生に生きる『地場産業』のDNA」(2018)『昭和女子大学現代ビジネス研究所2017年度紀要』
- 「『循環型地場産業』形成を促す観光振興の役割と可能性—地場産業産地の『観光まちづくり』による『地域活性化』事例を中心に—」(2019)『昭和女子大学現代ビジネス研究所2018年度紀要』